

昭和
和和
四十四
三十四
年

十七
二月
月二十
三十三
日
第三
行(種
月郵
一回便
・物
日認
發行可)

(通第二三五号)

次

四海兄弟と同一念仏……………近角常観……………(1)

近角常観先生を憶う……………花田正夫……………(7)

目

① 3.7.25
ただ念仏して
たのもしさ
(二)……………池山栄吉……………(11)

慈光

第二十卷

第十二号

四海兄弟と同一念仏

近 角 常 観

曇鸞大師曰く、

「それ遠く通ずるに四海のうち皆兄弟と為す。同一に念仏して別の道なきが故に」

と。四海兄弟の真意義は、如来の本願には、善惡をえらばず、貴賤を論せず、男女老少をいわず、古今東西をわかつたず、ただ選択本願の念仏をもって同一に救済せんとしたまえる大宝海に帰入して念仏成仏するにある。

世界主義とか、人道主義とか、平等主義とか言うことはただ漫然として、人類なるが故にとか、人間なるが故にとか、同一世界に生ずるが故にとか、万物同根なるが故にとかいうようなことでは根拠がない。単に人類の異同を問わずとか、国土の別を見ずとか、言語、風俗の差別を認めずとかいうのは、ただ偏見を払うばかりで中心を見出すことが出来ぬ。

四海兄弟の真意義は、十方衆生と呼びたまえる如来の本願の下に、善人もその善の功をみとめず、悪人もその惡を懺悔し、如何なる修行もその自力をなげうち、如何なる逆

実に如来の本願の前には大小の聖人も、その自力修行の功をみとめざるのみにあらず、全くこれをひるがえして、ただ弘誓の力を認むるのみである。

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば

大小聖人みなながら 如来の弘誓に乘ずなり。

如何なる竜樹、天親の大師といえども、如来の本願弘誓の前には、自力の心行をなげうちて、ただ大慈大悲を仰ぐばかりである。歎異鈔に「自力作善の人は、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず、しかれども自力のころをひるがえして他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生を遂ぐるなり」とあり、大悲の御恵みの前には大小の聖人もその善をみとむるあたわず、善凡夫も、有漏（うろ）の諸善も、その光を消されるのである。

実に、如来の光顔巍巍として、威神きわまりましまさぬ前には、日、月、摩尼珠の光の焰明（えんみよう）も、皆ことごとく隠蔽（おんぺい）せられて、なおし聚墨（じゆぼく）の如くである。

善人なおもて往生をとく、というは、善人がその善が間に合うて往生をとけるのではない。その善をひるがえしてただお慈悲ばかりで往生をとくるのである。たゞ念仏ばかりで往生をとくるのである。聖人であろうが、善人である

謗も、その邪見をひるがえし、有學、無學をへだてず、有罪、無罪を問わず、學ありて何等の力もなく、罪また飽くまで恵まれて、十方衆生、ただ如来の本願の下に同一念仏せんとする、これすなわち四海兄弟の一味の潮に入るのである。四河、海に入りて一味となるが如く、四姓（印度に四階級が嚴存する。）釈（仏弟子となって釈の姓となる）と称して、同一仏弟子となるのである。これ仏教の根本義である。しかれども仏教は單に四姓の別を見ずというだけの人間主義ではない、同一涅槃の醍醐味（だいごみ）を味わねばならぬ。正偈偈の、

能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖逆謗ひとしく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如しである。

親鸞聖人は法然上人の選択本願念仏を歎じて曰く、明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名づくるなり。大小の聖人、重軽の悪人、皆同じくひとしく選択の大宝海に帰し 念仏成仏すべし、と。

うが、如来の本願は専念である。自力作善が間に合うくらいならば、選択本願はいらぬのである、念仏成仏は不必要である。故に如何なる聖道も權假（ごんけ）である。如何なる万行諸善も假門（けもん）である。御和讃に

像法のときの智人も、自力の諸教をさしおきて

時機相應の法なれば、念仏門にぞいらたまう

とある。竜樹大師もその本意は南無何弥陀仏である、天親菩薩もその自督（じとく）は、帰命無碍光如来である。

恒沙塵数の如来は 万行の少善きらいつつ

名号不思議の信心を ひとしくひとえにすすめしむ

十方恒沙の諸仏の 証誠護念のみことにて

自力の大菩提心の かなわぬほどはしりぬべし

実に三世の諸の如来の出世の正しき本意は、ただ何弥陀の不可思議を説かんとその思召である。これ悲願の一乗（いちじょう）である、悲願の外に二乗三乗を認めぬのである。二乗、三乗は悲願の一乗に入らしむるためである。この悲願こそ実に第一義乗である、誓願一仏乗である、本願円頓（えんとん）一乗である。

聖道權假の方便に衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とそなる悲願の一乗帰命せよ

と仰せられたのが、絶対不二の如来本願の教たるゆえんである。

親の前には如何なる善き子も、自ら誇りとすることはない、如何に親孝行の子も親に対して、その孝を誇り得る者はない。又親が子を憐むにその孝たると否にかかわることではない、否親に対して孝をなせりと思う者あらば根本にあやまりているのである。如何なる孝子も自己の孝たりと思う心あらば、これをひるがえして親の大慈大悲に感泣すべきである。古のいわゆる善なおとらず、いわんや悪をやである。善すらな何等の効をみとめぬのである。いわんや悪をもつてさまたげとなさんや。孝子すら親の前にはその孝をひるがえして大慈大悲を仰がざるべき。孝子すら親はこれを憐愍して、その孝の功をみとめず、いわんや不孝の子に対して、しばらくも眼を放つべけんや、不孝たるだけ、それだけ捨つることは出来ぬのである。

親鸞聖人曰く「初果の聖者なお睡眠墮（すいみんらいだ）なれども二十九有にいたらず、如何にいわんや十方衆生海、この行信に帰命し奉れば撰取して捨てたまわず、故に阿弥陀と名づけたてまつる。これを他力という」と。

又曰く「願海は二乗維善の中下の屍骸を宿さず、如何にいわんや人の虚偽、邪偽の善業、雜毒、雜心の屍骸を宿さんや」と。即ち二乗の善人すらその善をとどめず、いわんや愚悪の凡夫の悪を転ぜざるべき。実に歎異鈔に「善人

る悪人、もとも往生の正因なり」と。これ実に彼の因を建立したまえる本意である。

この御本意を了知すること能わざるが故に、すなわち仏智不思議を信ぜざるゆえに、我等が善きを善として邪定聚、不定聚の機となるのである。

歎異鈔に「一人にても殺すべき業縁（こうえん）なきによりて害せざるなり。わがころのよくて殺さぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人を殺すこともあるべしと仰せのそうらいしは、我等がころのよきをばよしとおもひ、あしきをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまうということを知らざることを仰せのそうらいしなり」とあるが、所作の善惡に目がつきて、惡業煩惱のわれらを助けたまう本願の正意を頂かぬことをいましめられたのである。宿業のいかにによりて所作にあらわると否との區別こそあれ、実に罪惡深重、煩惱熾盛のわれら、かくの如き曠劫已來、常に没し常に流転して、出離の縁あること無きものをたすけんとの本願不思議を仰ぎ信ずる外はない。これ実に機法（きほう）二種の深信（じんしん）である、正定聚の機である。極惡深重の衆生、大慶喜心を得て、もろもろの聖尊の重愛をこうむるのである。

一寸聞くと、善惡をえらばずということ、悪人正機ということと何とやらん意味の異なるような点があるらしく感

なおもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや」と、宣う所以である。

選集には、もと凡夫のためにして、かねて聖人のためなりと仰せられた。正信偈には「本師源空は仏教に明らかにして善惡の凡夫人を憐愍す」といい、「一切善惡凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば」といい、善というも、惡というも、結局そらごとたわごとの煩惱具足、火宅無常の凡愚である。しかれども、その有漏（うる）の善をたのみにしているも、惡をかなしめるも、同様に憐れみたまうのである。「善導独り仏の正意を明らかにし、定散（じょうさん）と逆惡とを矜哀（こうあい）して」とのたもうもこれである。されど善凡夫すら憐愍し給うのであるから、惡凡夫は最も悲憐し給うのである。実に惡人正機（しようき）の本願他力の意趣を頂かねばならぬ。

如來会に曰く「かの國の衆生もしはまさに生まれんもの皆ことごとく無上菩提を究竟し涅槃のところに到らしめん。何をもつての故に、若し邪定聚（じやじようじゆ）および不定聚は彼の因を建立せることを予知すること能わざるが故に」と。これ実に惡人正機の真髓である。

歎異鈔に「煩惱具足のわれらいすれの行にても生死をはなれることあるべからざるを憐れみたまいて願をおこし給う本意、惡人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつ

することがある。これは喜惡をえらばずということ、善くても悪くてもよいということと思ひ、惡人正機ということ、惡人ほど一層よいということに誤解するからである。善惡をえらばずというは、いわゆる、我等が心の善をよしと思ひ、惡しきをあしと思うている心をひるがえして如來の御思召を頂くのが肝要である。その如來のお心というは、我等は実に善というも惡というもみなそらごと、たわごとにて、極重惡人、凡愚底下のものなるを、あくまでも見捨てたまわざる誓願の不思議である。この不思議を信じたてまつるのが往生の正因である、すなわち惡人正機である。弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず、ただ信心を要とすとするべし、そのゆえは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまはします、とは即ちこれである。和讃に

不思議の仏智を信ずるを 報土の因としたまへり

信心の正因うることは かたきがなかなにおかたし

かく信ずる一念に、実に我身の罪惡を自覺して、今まで我身の善いをよしと思ひ、惡しきをあしと思ひたることの間違ひたることが分るのである。実に「如來の御ころによしと思召すほどに知りとおしたらばこそよきを知りたるにてもあらめ、如來のあしと思召すほどに知りとおしたらばこそあしをしりたるにであらめど、煩惱具足の凡夫、火

宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」との仰せが、実に聖人御自督のきわみである。

全体善惡をえらばずということ、善くても悪しくてもよいと思うゆえ、邪見に陥れば、悪人正機というは悪人ほどよいということに誤解し、これを矯正せんとして、よくてもあしくてもよけれど、よくせねばならぬと思うて自力におちいるのである。

不思議の仏智をいただいて見れば、今まで善と誇れるも善に非ず、惡とおそるるも惡というに足らず、眞の惡は、罪惡深重、煩惱熾盛のわれらたることである。眞の善はこの如き罪惡を見捨てたまわざる本願である。「しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに、惡をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえに」全体、善くてもよい、悪しくてもよいという言葉が、なお、善くも、悪しくも、思うにまかせて出来るとの思いが本になつてゐる。全体これが間違ひである。悪人ほど一層よいというて、なおなすべき惡の余地あるが如く思つてゐる。極惡最下の者がこれ以上になすべき惡があるものか、たとい身に行わぬからとて、極惡最下と知らぬがあまりである。我等は地獄は必定すみかである。また善くてもよいとか、善くせねばならぬというは

め、ひとえに弥陀の御催しにあずかりて念仏申しそうろう人を、わが弟子ともうすこときわめたる荒涼のことなり」とあるも、皆如来の御弟子なれば、親鸞の弟子でない、眞におのれをむなくしたまうのである。

「法然上人の信心も、善信の信心も一つなり」と仰せらるるも同じく如来たりたまわたりたるからである。したがつて「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との法然上人の仰せが、形を見れば、法然上人、言葉を聞けば弥陀の直説である。「親鸞わたくしなし、如来の教法を十方衆生に説き聞かしむる時は、ただ如来の御代官を申しつるばかりなり」という謙虚なる態度が、知らず識らずの間に、我等がためには、眞に如来の化現として信仰したてまつる次第である。

本尊聖教は、如来の流通物（るつうぶつ）なればすこしも自専したまわぬのである、そのかわり、有情、群類、蠢々（じゆんじゆん）の輩まで、十方衆生の中なれば、如来の大悲をこうむれかしと思召すのである。たとい食膳にある魚鳥を見てさえ、せめて三世諸仏の解脱の幢相たる袈裟を着して、御縁をむなしくせぬようにとの深き思召である。これ実に如来の本願たる十方衆生、積尊の教説たる諸有衆生が、やがて信心を通じて自然に顕現したまうのである。ここに到りて四海兄弟以上に上りて、あらゆる生きと

全体我等が善く出来ると思つてゐるのがあまりである。

世間的に善いとしたところが、それを善として誇りとしてゐるが間違ひである。またそれを為さんとすれば出来るもののように思つてゐるのが間違ひである。我等が如き極惡最下のものを見捨てたまわぬ本願の親心をいたたく善にくらべて見れば、善と名づけらるべき善はないのである

聖人最終の法語としての御述懐に

よしあしの文字をも知らぬひとはみな

まことのころなりけるを、

善惡の字知りがおは、おおそらごのかたちなり。

是非しらず、邪正もわかぬこの身なり、

小慈小悲もなけれども、

名利に人師をこのむなり。

これ実に、聖人が如来の本願の前に、至心信樂おのれを忘れたまひたるかたちなり。実に如来の本願の前には、善もなく、惡もなく、貴賤縋素（きせんしそ）をえらばず、男女老少をいわず、造惡の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、ただ弥陀の誓願不思議を信じたてまつりて、念仏したてまつるばかりである。実に念仏成仏は眞宗である、同一念仏して別に道無きが故に、である。

聖人が「親鸞弟子一人もたすそうろう、そのゆえはわがはからいにて人に念仏申させ候わばこそ弟子にても候わ

し生ける者みな、如来の親心を頂くべきである。されど眞の兄弟の名乗りは同一念仏に入りたる時である。大悲の招喚が聞えたときである。同一鹹味に入りたるときである。

故に過去を顧みては、たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べといい、未來をのぞみては、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、いずれもいずれもこの順次生に仏になりてたすけ候うべきなり、とある。この如く三世に通じて十方を貫ぬき、あらゆる衆生、大悲招喚（たいひしようかん）の下に、ただ南無阿弥陀仏となつて眞の同朋、眞の兄弟を名乗るべきである。

安樂仏国にいたるには 無上宝珠の名号と

眞實信心ひとつにて 無別道故とときたまう

如来清淨本願の 無生の生なりければ

本則三三の品なれど 一二もかわることそなき

「求道」 第十卷第七号。

近角常観先生を憶う

(一)

花、田 正 夫

明治百年をかえりみる時、日本の仏教学の発展は世界の
人々の目を瞠（みは）らすものとなり、仏教学者は百華咲
き匂うが如く居ならび、又道德堅固の聖僧も多く輩出され
ている。然し、善悪を越えて、深く仏願に帰して「人生手
放し」の大信念のもとに、無尽の法灯を有縁の人々に点じ
続けた人はそう多くはないが、近角先生は実にそうした信
念の方であった。

先生は滋賀県湖北町の大谷派本願寺の末寺に、明治三年
に生れ、その信念は、つとに篤信な父君、常随法師に涵養
せられて「私の善知識は父である」と常に人に語られてい
る。その信念の確立したのは、明治三十年、先生が東大の
卒業間際であった。はじめ理想主義に立って、宗教のため
友人のため真剣な努力を続けられた結果、事志と違うにお
よび、世をかこち人を責めるといふ風であったが、それが
一転して、人が悪いと責めている自分自身に真実のない、
虚仮の身と気づかれて、大煩悶におち、半年以上も半狂乱
の生活、そのはてに生死もはかれぬ大病となられた。

その身心共に大苦悶の中で、自分は放縱懈怠（ほうしよ
うげたい）で父母にそむく、大経の五惡の罪人であり、父
を殺害して大苦悩のはてに重病になった五逆の阿闍世は我
であると悔むという有様であられた。さいわいに病が癒え
て病院からの帰途、フト碧空を仰がれた時、それまで豆粒
ほどの心が大空に吸いこまれる思いがすると同時に、に
わかにかが晴れ胸が開けて、仏は大慈悲者であり、わが真
実の朋友であると気づかれ、大歡喜のなかに所謂ただ一度
の廻心を体験せられたのである。この偉大な信念が、先生
の生涯の宗教活動を貫いたのである。

大学を卒業されて程なく山内閣の時、国法のもとに宗
教を嚴重に監督するために宗教法案が国会に提出される
と先生は大谷光演法主を中心に池山栄吉先生、後藤新平氏
等と力を合せて、宗教の自由の大切さと劃一的惡平等の非
と、更に国家の庇護の下にあっては宗教は却って無力化す
る等のことを指摘して、これに捨て身の反対を続け、漸く
その法案の阻止に成功された。大谷派本願寺はその労に応

遠

えて、池山先生と共に、二年間の欧州留学に派遣した。

池山先生は労働問題の研究、近角先生は世界の宗教事情
の研究を続けられたが、留学二年目に僧侶も代議士に出ら
れることになったので、大谷派本願寺として白羽の矢をま
ず近角先生に立てて、ドイツから急電呼びかえされた。

然し先生は西欧の宗教事情を視察して、国家が宗教を利用し、或は宗教が政治を利用したことによって起きた弊害
を多く知られ、且つは一人一人の信念の樹立の為に「譬え
ば大海の水を一人にて升量せん」との大経の大精神に感動
していられたので、帰国後堅く本山の申出を固辞され、
やむなく安藤正純師が出馬することになったのである。

かくて明治三十五年以来、先生は東京本郷に求道学舎を
設け、全国から集る帝都の青年学徒を中心に、活きた体験
の宗教を説き、五分五分との相対差別心からのへだて心の
やまぬ身が、やる瀬なき如来の慈悲に救済せられる道を、
御自身の体験の上からあらゆる人々に一筋に勧められた。

このことは混沌化する明治大正の時代に苦悩する青年学
徒の心に大いなる感化をあたえた。やがて会館は新築、学
舎も改築されて、東京における真面目な求道者の中心道場
となった。又明治三十七年に、求道誌を創刊されて全国の
求道者に頒布し、或は信仰余瀝、懺悔録、人生と信仰、信
仰問題、慈光録、親鸞聖人の信仰、歎異鈔講義、等々の出

版、更に、南は九州から北は北海道まで全国遊説に席の温
まる暇もなく活動されたのである。

かくて、当時の真宗信徒の多くが死後の救済のみに偏し
て平生の救済を軽視していることを鋭く警告されて、旧弊
を打破して、生活に即した信仰の鼓吹に尽粹せられた。そ
の影響は遼原の火のように各地にひろがって行ったが、そ
の反面に先生を偶像化する傾向もおこり、ことに九州方面
に多かったのが先生はその弊を強くいましめられている。
時あたかも大正天皇の崩御せられるにあたって、全国への
遊説を中止せられ、それから特別な場合を除いては東京
を離れず、会館での講話と坐談を中心に求道者と接して居
られた。ただ夏期には一週間の講習会を会館で開いて、午
前・午後は主に教行信証の講話、夜は求道者との坐談会に
よって一人一人の不審の解明に力をそそがれた。

先生が主に説かれたのは、教行信証と歎異鈔を中心とし
た信の問題であるが、信からおのおのずからにあらわれる行の
問題の指針としては、蓮如上人の御一代聞書と聖徳太子の
十七憲法を範としていられた。先生は或時「十七憲法を律
法的に行うならばすぐ行き詰ってしまうが、信の上に立つ
てこれを読むと無理のない自然の道としてひらけてくる」
と語っていられた。

(二)
先生の信仰運動の大略はすでに述べたが、時代の要求か

らやむなく動かされた社会活動の著しいものは、政府が度々提案した宗教法案への反対であった。ことに昭和二年からの岡田内閣による同法案の度々の提出があったが、これも先生の活動によって審議未了に葬り去られた。

この頃、東本願寺に例の光演法主の除藉問題がおり、先生は決然と立って、宗門革新運動をおこし、全国遊説と信界建現誌の発行によって、その復帰を世に訴えられた。然し「闇い部屋も電灯がつくと上下左右が自然にあきらかになる。子が親を勘当し、弟が兄を苛責するというような上下転倒の不祥事が行われているのは、信心の灯が消えているからである」と、信仰問題を中心に提唱せられた。本山は先生を除名するとか、同志の者を罪するという猛烈な弾圧を加えたが、先生に呼応して全国に数万の信徒が起って文部省に陳情する者が続き、遂に文部省も動いて、その仲介によって光演師の復帰は成った。

しかしその時すでに先生は脳溢血でたおれられて四年の病床生活であったが、それが御生存中に成就されたので、昭和十年夏にその吉報が病床にとどいた時「青天を仰ぐ心になった」と、その喜びを述べていられる。

然し、十三年十月には御長男の文常様が中国の廬山で戦死なされ、十四年二月には、戦時非常体制を機に、政府は宗教法案を強引に議會を通過せしめて、ただちに実施のは

こびとなった。病床でこのことを聞かれた先生の御心中は如何ばかりであったであろうか。このように世間的には重なる不如意の中に十六年十二月三日、御年七十二歳で、太平洋戦争勃発の直前に、静かに往生の素懷を遂げられた。

ところが皮肉なことには、戦時中、無理押しに施行した宗教法案は敗戦後、進駐軍の指示によって撤去せられたのである。ここにも我執をまじえられない、無我の活動の実りは、一時は雲霧にかくれても、国の内外を問わず必ず実現することを先生によって知らされる。

(三)

先生の生涯を貫ぬいた信仰活動において、三つの超越があったと福島政雄先生は語られている。

一つは態度超越である。話の間先生の手が種々に動き相手の真剣さに応じて身体をのり出し、つめよって畳を叩かれることも度々であった。又御講話中は満面微笑をたたえ、時に信仰の極処におよぶと涙にむせばれていた。

二つには時間超越である。話がはずむと食事も忘れ夜などは電車もなくなつて、聞法者は長い道を歩いて帰らねばならぬことも多かった。姉崎正治博士の母堂などは数時間たて続けの説法に脳貧血をおこされたこともあるという。

三つには、譬喩の超越である。先生が常に引用されたものは、姥捨山の話、手織の着物、お粥の念仏、囚人の親心

風がうかがわれる。

にめざめた例、或は不孝息子への父の叱り、人生すべて五分と五分、等々で、それらをほとんど毎回、亡くなられるまで、今聞いたばかりという風な調子で、くりかえし／＼同じことを説かれた。聞く人も不思議に何度聞いても常に新しい感動をうけて、そのたびごとに深く心の底にしみとおるものがあつた。実に「やるせないお慈悲」の権化の人と申せる方であつた。

(四)

先生の家庭生活は、聖徳太子と親鸞聖人の再現と云える。太子と母君と御妃との三人を、弥陀、観音、勢至の三尊と世間から仰がれ、親鸞聖人は恵信尼公と互に内心深くに観音として尊まれたことは誰も知るところであるが、先生は父君を善知識とあがめ、きそ子夫人は観音と学舎の人々から慕われ、令弟常音先生は、兄なる先生を善知識と常に語つていられた。御令息達ものこらず同じ信に生きて、それぞれの道にいそしんでいられる。実に信に莊嚴せられた理想的家庭である。

或人が、常音先生に「常観先生の子弟教育の中心のお心は？」とお尋ねした時、しばらく考えていられて「兄は自分を救うて下さる仏のましますかぎり、子供を捨てられるはずがないと確信しておりました、それだけだナ」と答えられた。そこにも無碍なる仏力を信じて人生手放しの徳

最後に、先生の感化をうけた人々の多いことは驚くばかりである。私は岡山生れで、六高時代に先生の無二の盟友池山先生の導きをうけたので、自然に先生の著書を当時から常に拝読し、且つは先生の流れを汲まれる人々にも親交して、間接の導きをうけたが、池山先生が亡くなられてからは、直接東京に先生をおたずねして、常音先生とお二人の教をうけて今日に及んでいる。

すでに両先生は亡くなられ、また先生方に御縁の深かった篤信の方々も老いてしまわれたが、その方々を縁として有縁の人々の心に降かれた信心の実が、尽未来際かけて、随時随所に真実の花が咲き続くことを信じている。実というは「カナラズモノノミトナル」と聖人が訓ぜられ、それが聖人亡きあと七百五十余年の今日、あきらかに我が国に顕現している事実を見る私には、何のためらいもなく、そうしたことが信じられるのである。

(註) 中日新聞に明治百年の記念に依頼されました時の原稿であります。

ただ念仏して

たのもしや

(2)

池山栄吉

念仏を聞きそめてから、惜しみなく奪い終るまで、意識に上るにせよ、それからそれと常不斷の過程をたどつてやまない幾多の生成推移は、箇々の事象からみれば、或は桐一葉、或はいとし子の死、さては空中の声、縁の下、の聴聞など、千差万別、それぞれの機縁に由来するが、その原動の源にさかのぼれば、一に力のもよおしにかかる、と、首肯（うなず）かされる理由がある。

他力の働く模様について、最近私の眼底に映じた光景があります。それを一々に紹介してみましよう。

他力の働きかける世界を、一つの球と見る。みなさんも先ず地球儀みたような球を想像してみて下さい。私達から見える前半分、仮りに前半球と命名する。前半球は現在に面している。だから見えるのであるが、球の後半分、後半球は未来に面している。だから私達の視界に入つて来ない。月の背面が見えないと同じように。

今、私達の目に見える現在面を熟視すると、中央部に、

小路である。

本文に述べたところに従えば、二の丸、三の丸が、転化の其一、其の二に、本丸が其の三に該当する。而して外濠を囲む外側一帯は、念仏も聞えず、よし聞えても、まだ称えるほどにいたっていない、無人空曠のはるかなるところである。

この見取図をそっくりそのまま裏返して、未来面の半球へあてがったらどんな景観を呈するかという、中心の本丸は、極楽無為涅槃の報土と変る。その色調は、まあ燦爛たる金色としておきましようか。それとも白金の方が好きだとあれば、そうしておいてもよろしいです。

二の丸、三の丸は、辺地懈慢疑城胎宮の化土とする。

色は銀乃至燐し銀ところ。外側一帯のみは、そのまま原状を続けるであろう、その原状とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、黒暗の三途であり、輪廻の六道である。色は依然として黒。

しかしなお子細に点検すると、前半球——後半球も、同断と見なすべき理由があるから、前半球といつてもよい——の状態は、中央部を除いては、そのまま静止しているのではなく、常不斷に移動しつつあるのである。

後半球の中央部、西方寂靜無為のみやこは、常住にして

白く光る一つの圈（けん）がある。仮りに本丸と名づけておく。本丸から一つの濠をへだてて更に一つの環（わ）が見える。色は淡灰色、二の丸と名づける。その外周に接して、又更に一つの濠をへだてて環状圈が見える。その色は濃灰色、三の丸である。三の丸の外周に、また一つの大きな濠があつて、その外側は見わたすかぎり一面に、黒暗々の一色に塗りつぶされている。

なお一つ見逃がせない現象は、全体の色調が中央部に近づけば近づくほど、明るさを増して、同じ黒や灰色にしても、だんだん濃度がうすれて行く傾向があるという点である。

みなさんは、もうおおかた、この譬喩のところに勤づかれたことと思う。球全体は、他力の働きかける限り、三千世界を打つて一丸としたもの。

中央の白圈、本丸は白道である、本願一実の大道である。淡濃灰色の二の丸、三の丸は、万善諸行、自力作善の

変易あることなきをもつて、その本質とする。

我能く汝を護らんの約束に、不退の位を確保される前半球の中央部、白道もまた然りと云いうる。但しここで変らないというのは、位置が変らないことを指すので、すべて活動が静止するという意味ではない。活動はますます盛んになりこそすれ、衰えるの、鈍るのというところのあらうはずはない。一は他力の大本宮、一はその御膝元、摂取の光明照護の丸の内であるのだもの。

中央部以外の部分は、大体において動きつつある。しかもその動きに一定の方向があつて、概して端から端へ端へと押して行く。局部的にはそれと反対、若くは別異の遠心的方向を取るものもあるが、それは一時的現象にとどまり求心的大移動が、なべての傾向である。

動くとは何が動くのであるか。地球が動くように全体が動くのであるか、そうではない。地塊運動とか地滑とかいつた風に、局部が動くのであるか、そうでもない。

動くのは場所そのものではなくて、そこに棲む有情である、苦悩の有情である。しかして動かすのは他力である。

もとより有情そのものも動く、併し彼等の運動は、循環的、復帰的である。永劫復帰、輪廻転生は、彼等にとつて必然のさだめである。彼等として中央帰趨を念願しないので

はないが、いかにせん彼等にそなわる性能が言うことをきいてくれない。他の方向には相当強く動くが、ひとり向中運動はどんなに奮発しても知れたもの、噴水が、はじめどんなに勢よく吹き出されても、或る程度までいくと、急に衰退してしまうのと同じである。

この空虚を満たして、中央帰趨の不可能を可能化することとは、所詮他力の働きを待つばかりではない。否、そのためにこそ現われたのが他力である。中央の清白圈、これは他力動向の最終目標である。他の一切の部分であけて、漸次この圈内に追いつくのが、他力活動の意図である。

してその手段は如何、動かすにしても、どうして動かすのかというところ、忍を獲させるのがその方法である。忍とは諦忍であり、信仰であり、念仏である。

現に清白圈の現存していることが、その成功を物語る。何となれば、以前、他力願現の以前にあっては、何処を見ても真暗闇の世の中であつたらうから。

如来の作願たすぬれば 苦悩の有情をすてずして
廻向を首としたまいて 大悲心をば成就せり。

縱令一生造惡の 衆生引接のためにとて

称我名字と願じつつ 若く不生者と誓いたり。

〃他力というは、如来の本願力なり〃

念仏の自動作用の著しい一つの方面は、念仏は自省を促すという点である。念仏は鏡である、淨玻璃の鏡、たとえば世間道德の鏡では、見る人みずから、目を掩わずにはいられない醜さも、怖めず隠せず、見つめることの出来るのは、念仏の鏡の特徴である。〃かねてしるしめして〃の念仏にむかつては、すこしの遠慮会釈もなく、自分を下へ果てることが出来る。私はこれを、念仏の洗滌作用と命名する。洗滌とは、どうだね、お前の本来の姿がわかるかねと、さとするという意味である。

今一つの方面は、自省は念仏の意義を深める、ということである。富士山は何万尺あると聞いても、聞いただけではその高さはつきりと想像することはむづかしいが、近く寄って見上げれば、一目で測り知ることが出来る。が海—海の方が山の高さに比して、より深いところがあるそうだが—海の深いところは目で見ただけでは、とんと分らない。しかしこの海のこのところは、富士山だけの深さがあると聞けば、富士山の高さを見た目で、その海の深さを想定するのは難くない。

わが身の煩悩の、富士の山ほどの高さに呆れば、それを包容して余りある、本願海、念仏の深さにも呆れずにはいられまい。してみると、煩悩の高さは念仏の深さの種で

白道への牽引、ここは本願力廻向の独壇場である。中央に帰趨せしめる向中運動は、すべて廻向による生成推移である。

念仏は自動する。念仏は自省を促し、自省は念仏の意義を深める。一方、念仏の意義が、いよいよ深く信知されるに従って、他方ますます深く自己の何たるかが認識される。信知の深まりと自省の深まり、両者は相関的に働きかけて、相互に促進を競い合う。が、その実、楯の両面とも謂つすべきもの、結局帰命の一念に抱擁する傾向に働くのである。落着くところへ落着かせるからくりの妙、ただ不思議と呆れるばかりではない。

他力はひとりばたらきである、と同時に自発的である。他の勧誘や要請を待つて動くものでない。名づけて他力の自動作用ともいってよい。その自動作用一般は、縦に古今を貫ぬき、横に十方を包んで、深広にして涯底なく。窺知(うかがいしる)臆測(おくそく) (そうそうする)を許さないものであるが、その作用が、私達に直接して現われているが、否、私達に直接しようがために、ことさらに現われたのが念仏である。であるから、念仏は自動する。

ある。これは念仏の自動作用ともいうべきもの。

この洗滌、自願の両作用は、一つの鉄索の両端につながれたケーブルの車である。一方が高まれば高まるほど、それと正比例して、他の一方が深まる。念仏への信知が、高まり、もしくは深まるにつれて、自己の真相への観察が、深まり、もしくは高まってくる。

われならぬ きよらのわれの われにありて けがれのわれを われにしらしむ。

念仏は、念仏する者を、結局おちつくところへ落着かせる。念仏の自動作用に、鬼に金棒、行軍のラッパの、強化促進の役割を演ずるものがある。さきに述べた、念仏の反復性がすなわちそれである。読書百遍、意おのずから通ず念仏だつて称え称えてる間に、点滴ほど堅い岩はない道理で、なんぼ耳の遠い人にも、いつか本當の意味のきこえなはいはすはあるまい。そこで私は、重ねてみなさんに、念仏の常用をおすすめすにはいられません。

習おうより慣れろである。ものは、いじくつてるまに、そのもののところ、本質、本當の取扱いがわかってくる。生花茶の湯などの骨も結局はそこにあるのだらうと思う。碁盤や碁石でもたびたびあつかっているうちに、石は

蛤、盤は船にかぎるといふ動かぬ味がわかつてくる。

今私の家にワハマンと呼ぶ犬がいるが、此奴、頭に私の手の平をのせて貰うのが大好きで、私の側にすりよっては鼻面で私の手をこついて、意のあるところをほのめかす。で、望み通りにしてやると、夢みるように目を細くして三昧に入る。これも矢張りふだん愛撫されるさまさまの仕方のうち、これが一番いいと体験した結果で、要するに経験の累積の揚句、新なる選択と変つていく。念仏もまた然りである。何だかしっくりしないと思ひながらも、となえとなえしてゐる間に、念仏の自動性、反復性が契機になつて、自覚的、無自覚的に、工合よく推移することはありうる。

念仏はメリヤスのシャツみたいなものだ。メリヤスとは莫大小、大小莫しと書く。はじめ手をとおしたときは、大きかったり、ちいさかったり、何んだかしっくり身につかない気がするが、着ている間に、のびたりちじんだり誰にも彼にも丁度よく合ってくる。結局、落着くところへ落着かせる。本願の念仏は、莫大小で出来ている。

念仏は招く「一心正念にして直に來れ」と。念仏の心意気が、よくこの言葉に現われている。今これを放浪の旅をつづける一人子の帰りを故郷に待ちわびる、母の心に引合はすことを許されるならば、直來をスグキテオクレ

たのが、万行諸善の自力を廻向をきらつて、特にえらんだ往相廻向の大作である。「大作とは、無得光如来の名を称するなり」だから體をやる歌は念仏である。そしてその念仏は、すなわち船頭さん、如来の心意気、即ち、罪惡深重煩惱熾盛の、衆生をたすけんがための願心を吹きこんだものである。

秘

歌は念仏、船頭さんは如来、船は本願、體は廻向。大悲の願船、念仏丸の仕掛、一目瞭然である。

弥陀角音大勢至 大願の船にひかれて

生死の海に浮かみつつ有情をよほうで乗せたもう。

大悲の願船の氷夫楫取が茫々たる生死海上に乗り出して、人名救助の本務遂行に従事しつつある相である。有情をよほう声、それこそは西岸からの喚び声、一心正念直來である。その声がさらに東岸、二河の前に立ちすくんだ人の心魂を徹つて、ほどはしる反響の声となったのが、滯命尽十方無碍光如来であり、南無不思議光如来であり、南無阿弥陀仏である。

先年病中、不意に思ひついたことがあるが、一心正念直來とは、念仏の意義の和述として、これにこしたものはない、極めて適切な措辞ではあるまいか。

「直來を本願招喚の勅命として、直ちに來れと読む

と訓じ、一心正念に、オネガイダカラと仮名を振つても、そう見当は外れてはいまいと思う。オネガイダカラ、スグキテオクレヨ、この哀々惻々の衷情が、相手の心に滲透し、感銘した極促が、やがてそのまま内から滲み出る切々の帰心ともなり、「念仏申さんと思ひいたつ心」もなるのであつてこの心境の変化こそは、力とその目的物との間に、二度と解ける氣遣いのない鞏固い結びを仕上げるのである。

北原白秋作、城ヶ島の雨と題する詩の一節に、こういうのがある。

船は體でやる 體は歌でやる 歌は船頭さんの心意気 船を動かすには、體がなくてはならない。體は船をやる力である。しかしその力の十分の發揚を期するには、船歌のはげましに待たなくてはならない。何故ならば、その歌には、船頭の潑刺たる意気がこもっているのだから。

まあ大体こんな風な意味だろうが、その歌を念仏としたらどんなものかと、考一考したら、私はこの文句をかりて他力の機構を象徴することが出来るように思う。

先ず船を本願とみる。弘誓の船、大悲の願船である。本願の船を進める推進機、體はすなわち行である。行は願を實現せしめる因であり、廻向である。そしてその因にあて

のは当然であり、いかにも父としての尊嚴さを想わせるひびきがある。か、やさしいやさしい慈愛そのものの母親がわが子の帰りを待ちわびて、蹣跚（あしずり）する思いを酌んで、スグキテオクレヨと読むのも、そうした場合に相応しいという点なら許されようと思う。「一心正念」もただただそのままとでも、訓じておけば無難だろうが、一歩奥にふみこんで、一心正念の生みの母、やるせない如来の思召にかんがみて、オネガイダカラと仮名を振つても、正鶴を失した見とは云われまい。

私の伴が長らく南米に行つていて、去年一時帰国した際何月何日帰洛仕候云々と友人知己に音信した。それはもとより当り前のことで、誰も怪しむものはないが、考えてみればチト変である。というのは伴が南米へ行った頃は、私はまだ京都に住んでいなかった。従つて伴もまた京都に住んだことはない。だのに帰洛とはおかしいではないか。また一遍も居着いたことのない処へどうして帰って行くことが出来るか、というなぞなぞみたい矛盾を感じる。が、よく考えてみると、それでよい、一向さしきわらない。保故ならば、たとい自分で住んだことはなくとも、親の住んでいるところへ行くのだから、行くはすなわち帰るのであるからである。

私達の浄土へ住生するのも、またそうである。また見もしらぬ浄土ではあるが、待っている親の家だもの、住くはやはり帰るのである。

オネガイダカラスグキテオクレヨ、何たる哀切な叫びであろう。掃りなん、他郷には停るべからず、矢の如き婦心が子に起るのは、切なる親心が子の心への徹到の成果であり、感入の反映である。その刹那、久遠このかた子ゆえの廻向、わたし一人を片思いの子の立場からは、瞋のそれともいい得ない、見もしなかった親と子の、初の名乗がすむのである。

この新なる心境のたたえる雰気は、たのもしさをその基調とする。たのもしさは、称えるものの心に残る余音であって、一度キヤッチし得たら占めたもの、随時随所に再現して、立消えに帰するおそれのないのがその特徴である。もとより人生の行路、愛欲名利の噪音の絶え間はないが、噪音の高まれば高まるほど、消えかえる念仏の中に、いよいよつものたのもしさは、念仏するものに絶えず繰返される体験である。この立場から神を知ったと思つていた私は、神を知つたと思つていたことを知った。私の動乱はそこから芽生えはじめた」とある有島武郎の述懐を聞けば、攝取の心光の保証を欠く信知の

ようなら、前者を確乎不拔の羅針盤とすれば、後者は天気図みたいなもので、低気圧とか高気圧とか、中心の移動するにつれて雨になつたり風になつたり、いつもうららかに日が照るには限らない。

こうした見方を前提として、歎異鈔第九章、唯円房と聖人との対話のくだりを読むと、語義を会得する上に便宜がある。

対話の様子は、みなさんの御手許に渡っているパンフレット「松舞台に呼びあげられて」に述べておきましたが、要するに「念仏は称えてはいるが、たいして喜びもしないのは信仰が堅実ではない徴候ではあるまいか、もしそうだとすると、俺にはもうこのさきどうしていいかわからない」これが唯円房のおそれたところで、その「いかにとそうろうやらん」どうしたことぞいまいしょうと、虎の尾を踏む思いであえてした問の中には、一期の安危、信仰の成否が賭けられている。

すると聖人は和顔愛語「よろこぶべきことを、よろこばぬに、いよいよ往生は一定とおもいたもうべきなり」よろこべないので、いよいよもつておたすけにあずかることは、間違いないと思われるがよい、と答えられた。紫電一閃、快刀乱麻を断つ。すさまじくもまたおそろしいのはこ

はかなさがおもわれて、うたた同情に堪えないものかある。

聖人がよき人の仰せに「ただ念仏して」と受入れられたとき、心の内面ににじみ出た文字が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためになりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」とある御持言である。

こうした気持、すくなくともその底を流れる基調は、たのもしさという言葉に録すことは出来ないであろうか。このたのもしさという気持が、白道を行く人々、私の所謂、白圈内に収容された人々の、不易の情調であり、不断の原音であるということは、いつの頃であつたか今よくおぼえていないが、私の年来の諦忍である。

たのもしさの姉妹感に、うれしさ、よろこばしさなどという情念がある。前者がどっしりとした常盤の松の操持性の持主であるのにひきかえて、後者には、とかうきうきとして落ちつかない浮草の浮動性がつきもので、諸種の動機の偶発的配合に左右されて、その日その日の風まかせ、あてにならないことおびただしい、もう一つ譬えて云つて見

の断案である。嬉しさ、喜ばしさを、信仰必具の要素の中から取除けてしまつたのである。

「よろこばぬにて」これが九章の骨子である。この言葉一つを手繰り寄せると、九章全体がぞろりといってくる。

「よろこぶべきところをおさえて、よろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくの如きのわれらがためなりけり云々」

信仰がないなら、よろこべないのは当然、よしよろこべたにしても、それはほんの一時の妄想で、いつか煙散霧消してしまふこと「たとえ糸にて物を縫うに、そのままにして縫えば抜けそうろうように」糸に信の結目がないのだから、いつのまにかすつぽぬけてしまつても仕方がない。が、信仰があるからは、よろこべるのが当然で、いつもそうありそうなのに、そこがよろこばしさの性分、浮動性のあさましさ、そうならない勝ちなのだから始末がわるい。

「愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることをよろこばず真証の証に近づくことを快しまず」聖人の感慨もつまりはここである。

だのに！「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の

凡夫とおおせられたることなればである。ここに煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、とあるところは、第三章の文を藉りて補足するところ煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなることあるべからざるをあらわれみたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなればとあるのに、しつかりあてはまるので、煩惱の重圧も、よろこびの軽躁も、知らぬが仏どころか、末の末まで見通しの上、よろこぶよろこばないを条件に取り入れられないで、ただただ一心正念にして直ちに來れ、と呼びかけたまう仏の本意に直接して、恍焉忘我、日頃の躊躇、抵抗の拍子も抜け、ずるずると本願の手許に引きこまれて他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりと呆れかえるのである。

かくの如きのわれらがためなりけりこれこそ信仰のきまりの上に、なくてはならない言葉である。信仰はこの言葉できまるのである、きまりがつくのである。この言葉に盛られた心的内容が信仰なのである。

聖人が「よきひとの仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり」と告白された、その信するとは、すなわち「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」と諦忍するのである。その氣持で師の仰せ「ただ念仏して」を受入れられたのである。前掲の御持言の中「そくば

たのもしき、それは單なる言葉であつてはならない。細綿嬋嬋として尽きない念仏の余韻でなくてはならない。

あるルッター研究者の説によると、ルッターも亦その信の確立には、随分苦勞したものである。神を信じようとして信じ得ぬ悩み、これはルッターに取って、極重の罪惡としての自覺であつた。神の有無を疑つたのではない、神に近づき親しむ氣になれなかつたのである。それはその筈、ルッターの心鏡に映じた神は、我々が観音菩薩に見るような、春風飴蕩のなごやかさは氣振りにも見えず、秋霜烈日、閻魔大王のようなすさまじい相好の持主で、外に瞋嫌の焰を現しているばかりか内にも情け容赦も荒々しさを懷いておると思えない。こうした神を信ぜよとは、光秀に向つて、飽くまで信長に信頼せよと強うると一般、無理な注文、出来ない相談をもちかけるというものである。この無理な注文に応じ、相談にのるべく、隠忍自重、ややともするとまたげようとする抵抗の頭を自から押えて、渾身の勇を鼓しつつ我等の父たる神の肯定をめがけて精進したのが、ルッターの求道の過程で、惡戦苦闘の果、精も根も尽きて、とうとう我を折つたところすなわち、信の成立となつたのであつたが、それも一度こっすり覺がついたとい

くの業をもちける身にありけるを」とあるのも、こゝうした氣持を挿入されたに外ならない、従つてかの御持言を裏書するたのもしきの感は必定、この「かくのごときのわれらがためなりけり」にも伴わなくてはならない。果せるかな、聖人はすぐこの言葉につづけて「と」しられて、いよいよたのもしく覺ゆるなり」と声明された。ああこのゆるぎのないたのもしき、なんとまあたのもしいことである。

よろこびは、信仰の必具条件でないとわかつて、一とまず安堵するものの、信仰はあつてもよろこびというような、温い情緒がともなわないうとすると、何だかもの足りない、淋しい糸の切れた風のように、たよりない感じなきあたわずで、それではどうも本当に落着けない、とおもうと安じたものではない、よろこばしきの代りに、その姉妹感たのもしきが控えていく。且つまたたのもしきのいるところ、姉妹たのもしきよろこばしきときどきは顔を見せようというもの、それでよい、正に両手に花である。

たのもしき、それは煩惱にかまけるこちらの態度如何にかかわらず、どうでも救わずにはおかない、むかうの意志の力である。その力への信忍の半面であり、不退正定の感応である。

うのではない。その後も時々抵抗の嵐、否定の浪が盛り返してくるたびごと、同様の奮闘が繰り返されなければならなかつた、ということである。

嘗ては神を知つたと思つていた。しかしそれは神を知つていたのではなかつた。知つたと思つていたのだつた、ということが今になってわかつた。これが有島武郎のいつわらぬ告白である。彼にしてみれば、神とはぐれたことも新しい道中の振出しとして、そう悲観したものではなかつたかも知れないが、否定を余儀なくされた心機一転の当座は、どんなに惡戦苦闘したものであつたらうか、とても同情しきれない程の窮境に陥つたに違いない。

鎮西の聖光房が、求法のために京洛にのぼり、はじめて法然上人をたずねた際、国元を出るときから、京に智恵第一の評判の高い上人が居るそうだが、しれたものだらう。逢うて一問答した上で、俺よりえらかつたら師と仰ごうし俺より劣つていたら弟子にしてやろう、と思つていたその不敵な面魂を、見逃がさなかつた上人は、逢うなりハタと聖光房をにらみつけた。聖光房も負けずににらみかへしたやがて念仏について一問答に及んで、さすが我慢の聖光房も上人の威尊に氣圧されたものか、橋をたてても及ぶもつかない」と観念して、二字を呈したとある。

たのもしさにまうあうたことよ、である。これをこそ生き甲斐のある生と云わないで何であらう。

私は今この見地に立って、世のまたこの「たのもしさ」を知らない人々に向って、謙抑と矜持と入り交った感じをもつて叫びたい、「あなた方は、それなしに、よくまあ生きて行かれますね」と。

たのまるる　ただ念仏のわれにあり

さるべき業は　さもあらばあれ

数年前の新年劈頭の偶感である。不可避の業縁の暴威を念仏のたのもしさに受け止めて、行路難の人生を切抜ける覚悟の出来た端的を詠んだもの。或る意味において、念仏者の主観にうつった無碍の一道とも見られようか。

この「ただ念仏」である。私の臨終——となるかもしれないと思つた病床に、山の端が出る月のように、ボツかり影を見せたのは。そして私につきについて離れないで「俺には念仏がある」と豪語させたのは。

それから少し経ってからのことである。病中深刻を極めた「ただ念仏」の感想が、病後の養生期まで持越して、頭の中が「ただ念仏」に独占されて、養生以外の有象無象の考えと、取組む余地がなかったとでもいうものか、ある日フト気がついて自分を見詰ると、自分はこの頃すっかり「ただ念仏」になり切ってしまった、罪悪だの、煩惱だのは、どこかに置いてきぼりになったような気がする。そう思うと、いかにもせいせいした好い気持ちになれそうなもの

念　仏

筑紫野　春草

たちねに抱かれ度しと死に近き乙女のねがひいやかなしけれ

抱きしめし娘をばよこたへまもあらず息たへしちふねむるが如く

いよいよ生きづき難しとさとりけむたちねの胸に抱きあげられて

最后ぞと棺につけたるのぞき密明けて見せしむ乙女の死顔

台上にいねたるままの骨の形とところなほ災上ぐ

よそおひし死顔をのぞき一時待たれて見るこの白骨のさま

われ等又いつかはかかる定業ぞとやからおのおのつぶやき念仏す

歌集　遊林より。

だが、そういえない。どことなくもの足りない。喜多八にはくれた弥治郎兵衛みだいだ。「煩惱のなきやらんと、あやしく候いなまし」あの皮肉な感だ。「道成寺鱗が肌のぬぎ仕舞」であるべき筈のところを、間違えて羽衣を引掛け、たよう、柄に合わない。で、こんな筈ではなかったがと、じつと楽屋を見直すと、案じたものではない、罪悪煩惱味のものが、チャンと身仕度に及んで、おのが出番を待ちかまえているのがうかがえる。矢張り羽衣を着る柄じやない。鱗の肌着が性に合っている、とわかってようよう落ちつけた。煩惱ぬきの念仏は、味のぬけた塩だ、こたえがない。煩惱あつての念仏だ。「他力の悲願は、かくのごとき

のわれらがためなりけり」だ。だからたのもし。まあまあこれで、どうやら読み切ったようです。「力への意志」の方へは、とうとう論及する暇がありませんでした。が、その材料の若干は、不知不識のところどころに織込まれているはず。いずれまたそのうちにまとめてお話しする機会もあるでしょう。

最後に、以上のべてきたたのもしの信仰に、ひきあわせて下さった聖人のお言葉「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこゝろむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」を繰返してこの講を終ることにいたします。(おわり)

パスカルの言葉

人間は現在の楽しみを語らぬものだと思う、然しまだ味って見ない楽しみの語らないことを知らぬ。これが移り気の生ずる原因である。人間は幸福から幸福へ転々としてすこしも満足することが出来ないから、遂に倦怠に陥る。

倦怠ぐらい人間に取って堪え難いものはない。何等の情熱もなく、仕事もなく、気晴らしもなく、安全に休んでいる時ぐらい苦しい事はない。この退屈に苦しむ時こそ、人間は必々自分の無能なこと、他人から見棄てられたことを感ずる。すると悲しさ、淋しさ、口惜しさが心の底から湧き出して、人間は憂鬱と絶望とに打ち沈むのである。

その結果、人間は慰安や、気晴らしを求める。賭博をしたり、獵をしたりするのも気晴らしを求めたいからであるまた最愛の妻や、独り子を失った人が涙の乾かないうちから球を撞いたり、テニスをしたりするのも悲しみを忘れるために他ならない。然し気晴らしぐらい悲惨なものはない。人間はそのために自分の悲惨を忘れるにせよ、気晴らしのために知らず識らず自滅の道をたどるからである。



あ と が き

年の瀬が迫りました、御忙しいことであ
りましょう。この十二月は、近角先生の御
忌月、また仏陀の成道の月であり、大平洋
戦争の勃発した月でもあります。

さて現在の日本、そして世界はと省みさ
せられますとき、唯力と力とが激突して、
所謂食うか食われるかの暴走がくりかえさ
れ、話合いの場は失われております。しか
もそれは他人が住む世界でなく、私自身が
起居している世界であり、逃げることも避
けることも出来ません。

さて風静かにして波穏やかな航海ではさ
ほど感じられませんが、風雨強く、波浪逆
巻く闇夜の航行には、磁石の指針が唯一の
よるべでありますように、こうした動乱の
中にこそ真実のよるべを一人一人が見出さ
ねば、徒らに右往左往と狂奔しながら、結
局は空しく終わらねばなりません。

動乱闇黒の千四百年前の日本で、聖徳太
子は「篤く三宝を敬え」と提唱され「それ
三宝によりたてまつらずば何をもつてかま
がれるを直うせん」と御自ら帰し、他に勧
めて下さり、それから四十九年の生涯を一
世間虚仮、唯仏是真」と、その道のたしか

さ、たのもしさ、不滅さを実証して下さい
ました。親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫、火
宅無常の世界は、よろずのことみなもてそ
らごとたわごとまことあることなきに、た
だ念仏のみぞまことにておわします」と九
十年の生活体験から讃仰していられます。

「真理の把持」を叫んで、あらゆる武
力、権力、金力に屈せず「天に向って唾吐
く者は、その唾を自らうけねばならぬ」と
叫びつつ堪えぬいてインドを独立に導いた
ガンジイ翁を思い。また「身は毒殺されて
も、わが説くまことは消えず」と独語した
ソクラテスを思い。更に「たとい殺されよ
うとも、念仏の一義とどむべからず」と御
流罪の日に語られた法然聖人の方の御心境を
うけて、人間一切の虚飾を仏って、真実を
求め、仏地に心を樹て、この事態に処し
て行く他はありません。

明治百年の臘月、近角先生の御導きを御
忌月に謝しつつ拙文を草しました。これは
中部日本新聞社に依頼されて発表しました
ものを多少補修したものであります。すべ
てものは見る者の心に限定せられますが、
未熟の私には御徳を損ねたことこそ多いと
悲しめます。ただ

ゲエテの言行録の中に「お前は詩聖ホー
マーを常に語るけれど本当のことは何も知
っていないではないか、と責める人がい
る。言われて見ればその通りであるが、
ホーマーは私にとって日月のような存在で
ある。人間はまだ太陽や月について未知の
ことばかりであるが、それを仰いでいると

自分の居場所が知られる、だから常に詩聖
を仰がずにはいられないのだ」と。このゲ
エテの言葉に支えられて、先生を仰ぎまし
た、御賢察を願います。

御 案 内

◆ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、
南区駈町二、一道会例会。

◆ 毎月二十四日、午前・午後、
昭和区小椋町市内教西寺、法話会。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番